

図書館だより

第 6 号

1988・8・15 発行

編集兼発行 三重短期大学附属図書館 514-01 三重県津市一身田中野字蔵付157

冊 0592
32-2342

目 次

学生が「読む」ということ	岡本 祐次 (1)
感心すること・イイナーと思うこと	宮本 忠 (3)
この一冊	鴛田 小彌太 (4)
いま読んでいる本	川田 光子 (5)
長い休みの中の読書	浮田 雅代 (6)
図書館特別メモ	(7)
図書館あ・ら・か・る・と(その3)	(7)
公立短期大学に望ましい職員のすがた	
新規受入図書案内	(9)
ベスト・セラーズ	(12)

学 生 が

「読む」ということ

岡本 祐次 (附属図書館長)

私は、仕事柄学生から、「どのような本を読めばよろしいでしょうか。」とよくたずねられる。このような場合、かれらが期待しているのは、担当科目に関連する標準的な教科書(格好よく基本図書などとよばれている場合が多い)であることがほとんどである。最近の学生の購入・帯出図書の傾向や、たずねられる時期などを考えあわせると、そうであることは、すぐに察しがつく。——もちろん、年度初めにサブ・テキストの類は、指摘してある。が、私の理想とする教科書は、とりわけわが国において、専門書たる名のもとに氾濫している教科書の類の中にはみあたらず、さりとして、自らそれに近いものの作成を模索して久しいが、あと一歩ということで、結局、講義用の教科書を指定していないことが原因で、かかる質問がでることも

推して難しくない。それは、それで結構なことだと思っている。しかし、このなんの変哲もない質問の中に、実は、重要な問題が含まれているのだ。つまり、かれらは、教科書あるいはその類の本を「読む」と表現し、実際、そのように考えているということ、これがその問題である。かれらのみならず学生一般がそう考えている傾向をみている——そしてそのこと自体は、小学校から高等学校に至るまで、現教育体制にふりまわされ、本といえば教科書(いわゆる「学参」をも含めて)のイメージしかもち合わせていないものたちにとっては、いたし方のないことだとは思っているのだが——のだから、なおさら問題である。

では、どうして問題であるのか。本来、教科書というのは、「共有財産的知識」を整理・体系化したガラスの小箱のごとき存在であるべきものだ。だとすれば、これを(かれらにいう)「読む」こと、すなわち、(私の考える)それを修得することは、それぞれの専門分野たる土俵に上る基礎がためのために、この上なく重要な要件ではある。しかし、教科書は、ガラスの

小箱ゆえに、初めから中味のすべてがすけてみえ、たとえふたを開いてみても、何ひとつ目新しいものは、みあたらない、所詮、そういったものにすぎないのだ。それゆえ、ある種の学生にとっては、それは、最低の努力で最大の効果をあげうる、最高の手段となりうるのかもしれないが、ある種のそしてまじめな学生にとっては、「読む」ものとして誤って扱われ、何かをみつけるべく努力されればされるほど徒労をつのらせ、結果、その苦痛がそれら学生をして本ばなれにと導くのかも知れない。だから問題なのだ。

間違ってもらっては困る。私は、教科書を「読む」といってはいけないとか、教科書は無価値なものだとか、いわんとしているのではない。学生が「読む」、という場合の「読む」は、本来、どのような意味をもつべきであるのか、たずねてみたいのだ。そこで、『日本国語大辞典』（全20巻）の精華を全1巻に結集したという、尚学図書編『国語大辞典』（小学館）の「読む」という項目を引いてみると、それは、こう説明している。

①数をかぞえる。一つ一つかぞえる。繰る。「鼻毛を読まれる」・万葉一三九八二「月日余美（ヨミ）つつ妹待つらむそ」②文章・詩歌・経文など文字で書かれたものを、声に出して一字一字言う。一字ずつ声をたてて唱える。・蜻蛉一中「経などよませてなん」③詩歌をつくる。詠ずる。・竹取「御歌をよみてつかはす」④文字・文章などを見て、そこに書かれている意味や内容を理解する。「グラフを読む」・蜻蛉一上「このごろよむとてもてありく書」⑤（「訓」とも書く）字音語を訓（くん）で表わす。漢字を訓読する。・平家一七「春の日とかいてかすがとよめば」⑥眼前の事物・行為を見て、その将来を推察したり、隠された意味などを察知したりする。囲碁・将棋などで、先の手を考えたり、相手の手筋を察知したりする意にもいう。「相手の顔色を読む」⑦講釈師などが歴史上の事件などを仕組んで講ずる。⑧カ

ルタ遊びをする。・浮・懐硯——「布袋屋が
るたの十馬八九く略」小者とも老文二文に読
（ヨミ）て」

みられる説明のなかで、とりわけ重要なのは、④と⑥だ。④は、本などに書かれている意味や内容を観察し、それを正確に理解することが、「読む」ということだ、といい、⑥は、本などに書かれていること、あるいは現実に見えているものからいろいろのことを推察したり、隠された意味などを察知したりすることが、「読む」ということだ、と説いている。これらからして本当に「読む」というのは、たんに書かれていないことを理解するにとどまらず、書かれていない筋道・主張・意味までも追求するということ、すなわち、「いままで見えなかったものが見えてくる」まで読み込むことだと、いいうるのであろう。そして、学生が「読む」という場合、その「読む」は、この意に解されてよいと思うのだが、どうであろうか。

増田信一氏は、『読書感想の指導』（学芸図書株式会社）のなかで、「読みの過程」は、五段階に分けられるという。すなわち、「①文字や語句を認知する過程（単純反応過程）、②表現内容を理解する過程（内容理解過程）、③文章の内容を判断する過程（自己判断過程）、④読み手が行動する過程（行動変革過程）、⑤自己を確立する過程（人間変革過程）」がそれぞれである。氏は、また、「私は、『読み』について、『読みは行動であり、読み手が明確な目的をもち、主体的活動することによって成り立つものであり、主体的な読みの行動は、当然読み手の人間的成長としての自己変革を促すこととなる。』と考えている。」といわれる。おおむね賛成である。だとすれば、本当に「読む」ということは、ここでは、少なくとも、③の自己判断過程に、いな④の行動変革過程に達するとき「読み」でなければならず、願わくは、⑤の人間変革過程に届くごとき「読み」であってほしい、ということになるであろう。そうして、学生が「読む」という場合、その「読む」は、またこの意に解されてもよいと思うのだが、

いかなるものであろうか。

かくして、学生が「読む」ということの意、私が如何に解しているか、大体の見当はつくであろう。一応、学生が「読む」ということの意がそういうものであるとしておいて、さすれば、そのように「読む」ためには、つぎのごとき習慣を身につけることが是非とも必要であると、声を大にして告げておくであろう。すなわち、元来、本を「読む」ということには、書き手が蘊蓄を傾注して作成した産物たる著作媒体として書き手と読み手が一対一で結びつき、読み手によるこの著作の十分なる味読をつうじて、その結びつきが、いよいよ深まってゆくところに、何ものにもかえがたい妙味があるのだ。だから、十分なる味読をするために、著作のなかを、けって駆けることなく、ゆっくりと歩む習慣である。なぜならば、たとえば、新幹線であるところから東京まで一日10往復した場合に比して、在来線で一日1往復しかしなかった場合の方が、なるほど目的地には10分の1回しか着かなかつたとしても、途中えられた地理学的、美学的等々の産物は、実に豊富であるのであって、これこそが、本来、人間性を豊かにもするがごときであるからだ。

私は、これまで、はじめに記した学生の質問に対する回答の如何を留保しておいた。いまやそのことにふれておかねばならない。まず学生の期待に応えるべく教科書の類を1、2冊指摘しておく。学生にとってはそれで十分であり、かえって迷惑だとは思いつつ、またほとんど無駄だとも思いつつながら加えて古典を1冊薦めることにしている。さきに教科書をガラスの小箱にたとえおいたが、もしここで、古典を箱にたとえおくとすれば、それは、浦島太郎の玉手箱とでもいいえようか。きれいに色どられた箱の表面を丹念に観察して、ふたを開ける「カギ」を発見すべく読み込めば、かならずや、いずれふたは開いて、見えなかったものを見えるようにしてくれる、行動変革・人間変革を可としてくれる「ケムリ」がたちのぼるであろう、そういう資質を古典はもちそなえているからである。

ある人は、読書には限界効用逓減法則は妥当しない、という。つまり如何なる読書であれ、プラスにこそなれ、マイナスになることは、まったくないのだというのだ。同じように経済学の用語で、学生が「読む」ということを示せば、いわゆる消費としての読書ではなく、生産的消費としての読書、それも単純生産的なそれではなくて、拡大再生産的なそれであればならぬであろう。

感心すること・

イイナーとすること

宮本 忠（法経科教授）

異郷に出ると、言語の壁にぶち当たり、カルチャーショックを受け、習慣・法律・社会的規範や道徳・宗教的感情・生活の相違などと、激しくぶつかります。まして仕事で「在る」となると、衝突のエネルギーは相当なものに高まるように思えます。で、狼狽しとまどい、やるせなさに地団太を踏み、理解不能きしみ悲しみ、しっちゃかめっちゃかなどなど、どうしようもないほどの複雑な心境に陥ることが、僕の場合しばしばあるように思えます。むろんルンルン気分で人生意気に感じることもないわけではありませんが、そんなことはまれです。だからそんな気分させてくれるサムシングを大事にしたいと思うのです。生きる糧にしたいのです。そんなわけで、紙面の許す範囲で、異郷で感心したことイイナーと思ったことを気の向くままに綴ってみます。

（その1）西欧の駅のホームは大都会（ロンドンなど）でも一般道路と同じ高さで長い階段を上下する必要はありません。お年寄、身体の不自由な人に優しい心づかいを感じます。

（その2）タスマニの下宿の大家さん（老夫婦）は私たちの隣りに住んでいました。トイレは壁一つ。ところが、御老体にもかかわらず夜8時頃から朝8時頃までトイレの音がしない感じなのです。1カ月ほど経って気付きました。

夜、私たちに騒音を出さない配慮をしていたのです。あんなに人口の少ないオーストラリアの人が……。

(その3)この老婦人70歳前後でした。毎日、美しく化粧し買物などドライブをしています。月曜日は朝からゴルフ行です。(タスマニアでは誰でも低料金でゴルフが出来ます。)欧米の老人は自分を美しく見せまた身体をそれなりにきたえる努力をしているようです。高齢化社会に突入して行く我が国にとって参考になる生き方だと思ふのです。

(その4)インドネシアの田園地方ではハダシで遊んでいる子供(大人も)が多い。彼らの目は澄み、大変、明るい顔をし屈託ありません。貧しいかもしれませんが日本の子供たちよりどこか健全に見えるのです。

(その5)インドネシアの人は人なつごいとか陽気とか。研究者の口からは絶えず冗談がとび出します。街で立ちどまるとすぐに人が集まってき、世間話に入ります。知らない人にも心を開くことが出来るとすればこれはすばらしい資質です。

(その6)西欧の人の会議の議論を聞いていると必ずどこかでユーモアを入れます。司会者もそうです。そんな気くばりが会議の雰囲気ですこぶるいいものになっているように思えます。

(その7)オーストラリアはイギリス系を中心としてはいますが、多元的文化・多民族・多言語・多宗教の国家です。彼らは、それぞれが強烈な個性を持ちつつ互の生き方・立場を大いに尊重しあい、社会・国家をつくりあげようとしています。これは開かれた社会の特徴だと思ふます。開かれた社会はこだわりのない人にとって気持のいい社会です。

(その8)イギリスでもオーストラリアでも、一時滞在(長期)の外国人にも、本国人と同様、医療制度の恩恵を受けさせてくれます。タスマニアでは公営住宅さえもそうした外国人に同居資格を認めています。度量が大きく寛大なことはありがたいことです。

(その9)西欧のどの町にも博物館を設け、

自分たちの町の歴史、文化、伝統を大切に守ろうとしています。町並み・自然環境を自分たちのものに慈しんでいます。大学キャンパス、公共広場・建物に品性と風格が漂っています。いつも花一杯の感じです。

(その10)西欧では公立図書館、学校制度が充実し、特別の場合を除き自分で本を買う必要はないようです。外国人も簡単な手続で本を貸出せます。高等教育機関は地域にとけ込み、社会人・老人・主婦学生も多く、授業料無料教科書代だけというところが目立ちます。誰でも学べる社会は人の質を重んじる社会だと思ふます。

こ の 一 冊

森 信成著『史的唯物論の根本問題 ——
戦後日本の思想対立』(青木書店、1958
年9月15日)

鷺田小彌太(法経科教授)

この書物には特別な思い出がある。思想的に決定的なインパクトを受けたことはいうまでもないが、書きたいのはいま一つのことだ。私は、1964年教養部を終え文学部哲学科の倫理学教室に進んだ。哲1(仏哲)には笹田利光、哲2(独哲)に田畑稔という、今もって付き合いのある三人が、別々の教室を選んだ。倫理は私一人である。当時教授は相原信作先生で、おそろしくコワイ先生だった。倫理学の学部ゼミは受講者が一人の時がほとんどで、特に学問的テーマではてんで歯がたたず、話が進むどころのさわぎではなかった。ある時、先生は旧約聖書、それも文語訳のものを読めといわれ、私に一冊下さった。私が少々キルケゴールにいかれていて、同じ下宿の哲2の浅野遼二さんの勧めで、ヒルシュ訳の『死に至る病』などを買って読み始めていたため、先生との話題が自然とキリスト教信仰に向いた故であらうか。この同じ時期、先生の棚にあったこの本をみつけ、ペラペラと

めくと、著者贈の紙片がはさまっていた。田畑からすでにその名を聞いていた森信成の思想と相原先生のものがあまりにも掛離れていたように思えたので、たしか、「この本どうされたのですか？」とおききした記憶がある。

「大阪市大に出講した縁で」というのがお答えであった。それからしばらくして、先生はどうもその本を私が狙っているということを察してか、一寸考えあぐねた様子で「贈られたのであげるわけにはいかないが、使いなさい」という風にいわれた。それ以来、この本は私の占有物となっていまもって私の手元にある。

私の「本格的」(?)なマルクス主義思想への接近は、この時から始まった。

相原先生は、西田幾多郎の直弟子で、京大文学部では、石田英一郎(人類学)、桑原武夫とならぶ文字通りの秀才であったとよく色々な方からきかされた。中学の時、通勤電車の中でカントの『プロレゴメーナ』を読破し、そのことを西田に言う一寸たしなめられたなどという逸話は、私自身、先生の口から聞いたこともある。議論好きだった私も、相原先生とは、端から議論するなどという気は起こらなかった。

森信成のこの本は、よく売れた本で、初版を持っているのは私達より少し世代が上の人達である。レーニンの『一步前進、二歩後退』の一節を引き写したと思われる、「はしがき」冒頭の一節は、私達の周囲の学生の思想的構え——しばしば建て前に逸脱することはあったが——の基礎となっていた。

「富と権力をもたない人民の現在におけるただ一つの思想であるマルクス主義の力、その力の唯一の源泉は何であろうか。それは思想の力であり、理論の力である。もしもマルクス主義が思想においてアイマイであり、理論において不確かであるとするならば、それはマルクス主義と人民にとって何を意味するであろうか。誤りは人間にとって避けがたいものである。しかしもしマルクス主義が誤りの訂正と検討において真剣さと率直さを欠き、しばしば伝えきかれるようにそこにおける批判と自己批判の自由な

展開が妨げられているとするならば、それは何を意味するであろうか。……」

私はこの書物によって後々までの自分の研究領域を決定づけられた。森信成先生と直接お目にかかったのは、それから数年後であり、その後は著作とともにその人格と密接に付き合うことにより、戦後マルクス主義哲学の一具体像を獲得することになる。

森先生より10歳年上の相原先生はなお健在だが、森先生は10年余前50代の若さで逝かれた。森先生の死は、私個人にとっては、戦後マルクス主義の転換期と絶妙に重なっていたこと、その後に強く強く実感した。

(昭58・1・12)

いま読んでいる本

コレット・ダウリング著、本村治美訳
『シンデレラ・コンプレックス』
(三笠書房刊)

川田光子 (家政科教授)

図書館だよりに寄稿することを約束した(させられたという方が正しいが)ものの、仲々ペンが進まない。まず、何について書くかに困ってしまうのである。最近のベストセラーのうち、「気くぼりのすすめ」とか「積木くずし」など軽いものは読んだが、それらについて特に書くこともなく、「裸のサル」は角川文庫で読み、自分なりに面白くはあったが紹介するにはむずかしくもあり、気遅れも感じて書けない。せっぽづまって、本屋の店頭であれこれ物色し、耳なれない言葉の題目と訳者の名前につられて買い求めたこの本が題材として残ったようなわけである。

前置きはこのくらいにして、内容は、「自立にとまどう女の告白」と副題にあるように、女の自立について、著者自身の体験を出発点として、主としてアメリカのいろいろな立場の女性についての調査結果をもとに、その障害となる

ものを、心理面から掘り起こして述べたものである。

まず、女性の自立をはばむものは、幼児期からの育てられ方に男女差があることである——男性は自立を目ざして組織的に育てられるのに対して、女性はその逆の、依存だけを仕込まれている——というだけではなくて、多くの女性の心の奥底に、ゆがんだ心理現象が見られることを示唆している。この心理現象の中心は、「他者によって守られていたい」という心理的依存状態である。即ち、シンデレラのように、いつか素敵な王子様があらわれて、この世の苦しみから自分を救ってくれることを待ちのぞむ女性一般の心理であるとし、これをシンデレラ・コンプレックスと名付けている。これについて、彼女自身の体験も含めて、多数の実例をあげて、女性自らが能力の開発を怠り、自己の人間の成長にモラトリアム（停止）をかけ、自分が責任をもつことを回避していることにはかならないと指摘し、自立できないのではなくて、自立したがるいとまで云い切っている。

自分が責任を持ちたくない心理は、一人で立派にやっていると宣言したくない、それは助けを乞うわけにはいかないから、につながる。さらに、成功や自立は女らしさを損い、男性にとって魅力的でなくなるのではないかと恐れてしまう。現代女性は矛盾や葛藤に苦しみ、これを乗り越えなければ自立し得ない。ここで著者は豊富な実例をあげて深層の心理をえぐり出してみせる。隠されたというよりは気づかなかった心理、あるいは自分では認めたくない程見苦しいこともさらけ出している。この点がこの本の一番の特徴であろう。

私はこの著者の執拗さに辟易し乍らも鮮烈な個性に感じ入り、アメリカ人ならではの感を深くした。同時に又、女性の置かれている状況が、日本と余りにも類似しているのに驚き、発刊年をしらべた程であった。1981年である。アメリカの社会では女性はもっと自由であり、翔んでいる女性も数多くいるかのように、いつのまにか思い込んでいたのに、日本の社会とそれ

程変わらず、今、このような著作がなされていることに、何かほっとしたのも事実である。読み終えて趣旨はよくわかったけれど、何が何でも自立を、完璧な自立をということに全面的賛意をもったわけではないことをつけ加えつつも、著者の言葉を記して自戒としたい。

自由へ向けて翔んだ女性は、感情的にしなやかです。自分の心を満たすものへは自ら近づいていきますし、そうでないものからは離れます。

彼女は成功することになんの抵抗もありません。失敗するかもしれないなどという不安なしに、目標を設定し、そこへ向かって進んでいきます。彼女の自信は、自分の限界と能力を現実的に評価するところから生まれます。

自分の人生を縦横に変化させ、臆することなく未知の領域に適應していこうではありませんか！ それには、自分の力を信じる力が最低限必要です。

自由や自立は決して他人から奪いとるものではないことをわたしは学びました。それは、努力して心の中に育てていくものです。それを手に入れるためには、わたしたち女性がまるで松葉杖のように長年すがりついてきた依存心を捨てなくてはならないでしょう。

長い休みの中の読書

浮田 雅代（専攻科学生）

図書館の方から、読書について何か書いて下さいと言われ、私はたいへん困った。なぜかという、最近、そのようなことから、遠ざかっているからである。私は、どうも凝性なためか、中学生の頃、図書館の本を乱読したことがあった。そのきっかけとなったことは、実に単純だった。友達の本の返却に付き合っていてなにげなく、学校の図書館を見まわすと、ひときわ目立つピンクの本が、ずらりと並んでいる棚があった。それらの本は、少女小説シリーズであった。そのかわいらしいピンクにひかれた私は、その中の一冊を借りて読んでみることにした。その頃、13才ぐらいだった私は、ロマンチック

クなものに憧れる手頃だったので、1冊読んだら意外とおもしろく、そのシリーズを読み尽くしてしまった。しかし、内容のにかよった少女小説だったので、今となっては、どの本の主人公が誰で、どんなあらすじであったのか、頭の中で、からみ合ったままになってしまっている。

私は、バツタリと本を読まなくなったり、急に本を読みたくなると、たて続けに読んでしまう。そのような私が、今、読書というと、夏休みとか冬休みといった長い休みの中で、手持ち無沙汰から、なんとなく考えることもなく急に読み始めるのである。それも、今の私、あるいは、これからの私に、密接した内容の小説を、知らぬ間に、本屋さんのたくさん並べられている単行本の中から選んでいるのである。たとえば、恋愛小説……。

私にとって、長い休みの中での読書は、心を落ち着せるものであるし、また、空虚な心の中に何か、刺戟をあたえてくれるものであり、そのような時が、私は、とても好きだ。ゆったりとした気分の中で、世界は無限に広がり、自らがヒロインになってみたり、将来の自分の姿や、いつか出逢うであろう男性像を描いてみたり、さまざまな情景が思い浮ぶ……。

私は、そんな読書が好きだ！

◇◇◇ 図書館特別メモ ◇◇◇

1883年は、カール・マルクスが世を去り、ジョセフ・シュムペーターとジョン・メイナード・ケインズが生まれた年である。したがって今年には、くしくもマルクス没後100年、他二者生誕100年が重なる。これを記念して、国の内外では、出版界・学界関係等の行事が忙しくなりそうである。本誌においても年度が変れば、関係する特別の企画を編もうかと考えているが、とりあえず余白を利用して、本年1月来わが国の誌・紙上において目にとまった特集ならびに予定されている学会をメモしておきたい。

〔1〕 雑 誌

- (1) 別冊経済セミナー〈1月〉・マルクス没後100年(日本評論社)
- (2) 経済セミナー〈1月号〉・ケインズ生誕100年によせて(日本評論社)
- (3) 経済セミナー〈2月号〉・マルクス、ケインズ、シュムペーター(日本評論社)
- (4) 経済セミナー〈8月号〉・ケインズ・シュムペーター生誕100年(日本評論社)
- (5) 経済〈8月特大号〉・マルクス没後100周年にさいして(新日本出版)
- (6) 朝日ジャーナル〈3月4日号〉・没後100年、マルクスとは何だったのか(朝日新聞社)
- (7) 思想〈3月号〉・マルクスと現代(岩波書店)
- (8) 別冊経済セミナー〈3月末号〉・ケインズ生誕100年
- (9) 世界〈4月号特大号〉・ケインズ生誕百年(岩波書店)

〔2〕 新 聞

- (1) 日本経済新聞〈1月1日-6日〉・特集経済学100年
- (2) 日本経済新聞〈2月21日-〉・経済学巨人たちの百年
- (3) 朝日新聞〈夕刊、3月7日-〉・マルクス没後100年

〔3〕 学 会

- (1) 経済理論学会関西支部会〈大阪経大・3月14日〉・マルクス没後100年シンポジウム
- (2) 経済理論学会第31回大会〈日本福祉大、10月1日-2日〉・マルクス没後100周年記念行事 (Y. O. 記)

図書館 あ・ら・か・る・と

(その3) 公立短期大学に望ましい職員のすがた

(以下は、公立短期大学図書館協議会が、昭和53年(1978年)に作成した『公立短期大学図書館改善要項』第4章職員の項の全文である。)

1 職員構成

職員は、管理運営面を統括する図書館長と、専門的業務にたずさわる司書と、組織・施設の維持のための会計・事務全般にたずさわるその他の職員で構成する。

(1) 図書館長

図書館長についての詳細は次号に譲る。

(2) 司書

司書は、資料の選定・収集・組織・利用の提供などを通じて、図書館の有効な運営に従事する。ことに、図書館員としての専門的知識、技術、経験を基礎にして、さらに学問分野の趨勢と学生・教員のおかれている立場と意識を的確に把握し、かつ、その傾向を熟知して、資料と利用者を結びつける任にあたる。

したがって、司書の資質としては、学問全般特にその短期大学の学科に関連する領域の文献について、絶えざる向学心と、真摯な態度と、資料に通暁するための努力をあわせもっていることが要求される。また、短期大学図書館にあっては、学生生活や学生の心理について深い関心と理解をもつことも要求される。

以上の点から、司書は図書館法上の司書の資格をもった者をあてる必要がある。

さらに、司書の専門性にかんがみ、行政組織上の規則等に裏づけられた独自の責任分担と、専門職としての身分が保障されなければならない。

(3) 事務・その他の職員

事務・その他の職員は、上記司書の専門的職務以外の会計事務や、施設・設備・備品の維持などの一般的事務に責任をもつ。

2 職員数

職員の数には、学生数・教育方針・開館時間・施設の構造・蔵書冊数・年間増加冊数及び閲覧業務の範囲などに応じて、それにふさわしい定員が考慮されなければならない。しかし、図書館機能を維持・遂行するには規模の大小にかかわらず、最低・基礎的な職員数が確保されることが前提となる。

また、図書館資料は年ごとに増加累積し、そ

れに伴って整理業務や利用が増大するので、職員数は蔵書の増加に比例して漸次増員が必要となる。

したがって、職員数を固定的に考えることは妥当でないが、日常業務量からみた基礎的職員数は、学生数300人までの規模で最低司書4名とする。注1)

さらに、この業務量に基づく職員数を基礎として、実態から算出した規模別の最低職員数を参考までに掲げると次のとおりである。注2)

学生	職員	司書及び事務・その他の職員
300人未満		4名
500人	〃	5
700人	〃	7
1,000人	〃	8

この職員数は、短期大学図書館として望ましい最低のもので、各短期大学によって業務形態などに応じて、増員されなければならない。

3 職員組織

職員組織は、次号で述べる業務組織に準じて形成されるのが常である。しかし職員数の少ない短期大学図書館では、複雑な組織化をするよりは、かえって単純化させて各人の事務分掌を定め、それぞれの権限と責任の範囲を明確にして、相互に協力・提携し業務を推進することが望ましい。

4 研修

図書館に従事する職員は、司書であると否とを問わず、図書館に関心をもち意欲を高めるよう、業務に関する科学技術の進展に即応した専門的知識と技術をたえず吸収するため、研修の機会と時間ならびに予算が確保される必要がある。

また、類縁機関等の対外組織と積極的に連携し、常に自己研鑽に努める必要がある。注1) 業務量に基づく職員数基準

I 整理関係	年間受入図書冊数	1,600冊に対し	2人
	年間受入逐次刊行物種類	数500種に対し	1人
II 閲覧関係	学生数	300名に対し	1人
	計		4人

国立大学図書館の事務量に基づく職員数基準及び私立大学図書館改善要項(館員数)による。

注2) 定員の少ない館(最低5名までの図書館)では、一人の職員が各種の業務(専門的業務や一般的業務)を担当することになる。その場合、事務・その他の職員が一般的業務と並行して専門的業務にたずさわるよりは、司書が専門的業務と並行して一般的業務にたずさわったほうがよいと考えられる。

新規受入図書案内

総記(000)

年報こどもの図書館	1981年版	児童図書館研究会
日本の図書館	1982	日本図書館協会
環境教育(ブックレット10)		都留 重人
マイコン+ロボット=衝撃(ブックレット11)		赤木 昭夫
寅さんの教育(ブックレット12)		山田 洋次
世界人権宣言(" 13)		イーデス・ハンソン 他
発達心理学(新書 黄 211)		藤永 保
作物改良に挑む(" 212)		山口 彦之
J・S・バッハ(" 213)		辻 荘一
一路白頭ニ到ル(" 214)		高瀬 善夫

外国人とのコミュニケーション (新書 黄 215)

J. V. ネウストプニー
歴史的環境(新書 黄 216) 木原 啓吉
教育とは何かを問いつづけて(新書 黄 217)

大田 堯
徳政令(新書 黄 218) 笠松 宏至
嫌煙権を考える(新書 黄 219)

伊佐山 芳郎
書評の同時代史 鷲田 小彌太

Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse
3

書誌年鑑 1982年版 朝倉 治彦 他
図書雑誌, ジャーナリズムに関する10年間の
雑誌文献目録 日外アソシエーツ

朝日新聞 縮刷版 1982. 10. 11.
12 朝日新聞社

伊勢年鑑 1983 伊勢新聞社
図書館用語辞典 図書館問題研究会

哲学・宗教(100)

生きがいの周辺	加藤 秀俊
唯物史観の構想	鷲田 小彌太
近代日本哲学思想家辞典	中村 元 他
Hegel Bibliography	Kurt Steinhauer
Ideologie und Erkenntnistheorie M. Thom	
Karl Marx Sein Leben und seine Zeit	Richard Friedenthal
Klassiker der Philosophie I	Otfried Höffe
Immanuel Kant zu ehren	Joachim Kopper 他
Hegel—Der Triumph des neuen Rechts	W. R. Beyer
Marxism and the Methodologies of History	G. Molennan
L'Empirisme de Locke	F. Duchesneau
視覚の心理学	鳥居 修晃
ロールシャッハ診断法 I	高橋 雅春 他
" II	"

歴 史 (2 0 0)

石川節子 澤地 久枝
 西洋歴史奇譚 ギイ・ブルトン 他
 日本史小百科 13 藤岡 謙二郎 他
 改訂新版 海外生活の手引 14・15
 外務省情報文化局
 Le Moyen Age Michelet
 Le Journal de la révolution française
 B. Soanen

社会科学 (3 0 0)

Essays in Economics Theory and Policy 3
 J. Tobin
 家計調査年報 昭和56年版 総理府
 家計消費の動向 昭和56年版 経済企画庁
 犯罪白書 昭和57年版 法務省
 日本博士学位録 沢田 都仁
 最高裁判所判例解説 昭和52年度 法曹会
 " 昭和53年度 "

教育状況の現象学 山下 栄一 他
 河上登全集 4. 8. 10 河上 肇
 Non-Price Control North-Holland
 Manetarist, Keynesian and Classical
 Economists J. L. Stein
 国際政治経済の構図 猪口 孝
 Government Against Poverty James Tobin
 教育関係基本法規集 第2版 尾吹 善人 他
 Economics of social Issues R. H. Leftwich
 教授のための学習心理学 R. M. ガニエー
 Theories of Learning G. H. Bower
 暴力のオントロジー 今村 仁司
 日本労働年鑑 1983年版
 大原社会問題研究所
 幸徳秋水全集 1~9 別巻 1, 2
 華頂短期大学三十年のあゆみ 華頂短期大学
 大逆事件アルバム 幸徳秋水全集編集委員会
 子供の目から見た世界 M. サイム
 経済の英語 寺澤 浩一
 マルクス著作と思想 望月 清司

Proceedings of Fleet Conference

T. Hattori 他
 Econometric Models as Guides for Decision
 Making L. R. Klein
 Eurocommunism and Détente R. Tökés
 States and Social Revolutions T. Skocpol
 L' Ecole des Jeunes Hegeliens C. Rihs
 Social Structure and Personality
 T. Parsons
 The Development of the Modern State
 G. Poggi
 Les Nouveaux Communistes A. Laurens
 教育学大全集 25 池田 央
 高知短期大学二十年史 外崎 光広
 女子美術大学略史
 女子美術大学略史編纂委員会
 女子美術大学八十年史 女子美術大学
 華頂学園五十年史
 日常性の社会学 加藤 秀俊
 食生活を探検する 石毛 直道
 日本料理史考 中澤 正
 増訂 米の文化史 篠田 統
 日本人とたべもの 近藤 弘
 料理の起源 中尾 佐助
 日本人の味覚 近藤 弘
 行政法基本判例 林 修正
 行政法入門 [新版] 今村 成和
 演習 行政法 塩野 宏
 ワークブック 法制執務く改訂 前田 正道
 日本の司法と行政 田中 二郎
 行政争訟の法理 田中 二郎
 昭和57年版 中小企業白書 中小企業庁
 日本外交30年 外務省戦後外交史研究会
 日本政治史 IV 信夫 清三郎
 昭和57年版 国民生活白書 経済企画庁
 昭和56年版 労働白書 労働省
 刑法総論 中山 研一
 講座史的唯物論と現代 1-6 島田 豊 他
 精神経済学の試み 歌田 久子
 Main Currents of Marxism Vol. 1~3
 Leszek Kolakowski

Vocabulaire du marxisme Gerard Bekerman
 Das Werk von Marx und Engles in der
 Literatur der deutschen Sozialdemokratie
 (1869-1895) Bibliographie
 Marx-Engels
 Ausgewahlte Schriften (1918-1964)
 Vol.1 ~ Vol.3 E. S. Varga
 消費者政策 小木 紀之 他
 東京大学公開講座 11 大河内 一男
 現代資本主義国家 田口 富久治
 吉野の民族誌 林 宏
 日本女性研究基礎文献目録 内野 久美子
 現代刑法講座 第五卷 中山 研一 他
 世界旅行— 民族の暮らし 1~5 大丸 弘 他
 カウンセリングのすすめ方 中西 信男
 日本都市年鑑 1982 全国市長会

増補改訂 現代きもの用語事典 本吉 春三郎
 着つけと帯の結び方 香西 洋子
 マクラメあそび 網代 一 他
 着つけと帯結び 講談社
 独習手編み全書 講談社
 原発症候群 西山 明
 被服整理学 小ノ沢 治子
 婦人既製服パターンの理論と操作 小野 喜代司
 エネルギーとその資源 崎川 範行 他
 野菜ガイドブック 山口 文芳 他
 魚ガイドブック 清水 誠 他
 野菜の科学 粕川 照男
 製菓事典 渡辺 長男 他
 調理の科学 中浜 信子
 食用油脂とその加工 小原 哲二郎
 ファッションデザインの技法 隈部 恵子
 Warp and Weft A Textile Terminology
 Dorothy K. Butnham

自然科学 (400)

精神医療のひとつの試み 島 成郎
 生活と化学知識 川本 和明 他
 生活の化学— 改稿版— 千谷 利三 他
 エネルギー代謝の栄養・生理と室内衛生
 仲原 弘司
 食の科学と健康 高橋 勇 他
 科学者のためのレオロジー 小野木 重治
 食品の物性 N. Mohsenin
 化学英語の活用辞典 千原 秀昭
 暴力の起源 A. モンターギュー
 メローニ 図解医学辞典
 栄養指導に役立つコンピュータ入門
 日本栄養士会
 昭和57年版 厚生白書 厚生省
 井尻正二選集 第8巻 井尻 正二

工学及び家政学 (500)

きもの着付け小事典 松島 茂雄 他
 帯結び小事典 装道きもの学院
 和装小事典 装道きもの学院

産 業 (600)

消費者のための有機農業講座 2
 日本有機農業研究会
 昭和57年版 運輸白書 運輸省
 水産加工 須山 三千三

芸 術 (700)

日本の美術 198~201

語 学 (800)

角川古語大辞典 (1)あ~か 中村 幸彦 他
 A Supplement to the Oxford English
 Dictionary R. W. Burchfield
 アメリカ、ウェスタン辞典 大島 良行
 オックスフォード、カラー英和大辞典 1~8
 英語雑学事典 トム・バーナム

文 学 (9 0 0)

- 忘れられたものの暦 澤地 久枝
 愛に生きたフランス女流作家たち 辻 昶 他
 バルザックと歩いて 九野 民也
 芭蕉七部集評釈 安東 次男
 続 芭蕉七部集評釈 安東 次男
 イギリスの生活と文化事典 安東 伸介 他
 ポプキッズ受容の六十年 大道 末吉
 悪魔の火祭 高木 彬光

ベスト・セラーズ

- 名古屋 ちくさ正文館
 1位 気くばりのすすめ 鈴木 健二
 2位 四国連絡特急殺人事件 西村 京太郎
 3位 老化は食べ物が原因だった
 B. S. フランクク
 4位 反核異論 吉本 隆明
 5位 東京漂流 藤原 新 他
 6位 男は20代に何をなすべきか
 鈴木 健二
 7位 湖底の光芒 松本 清張
 8位 新・日本人は死んだ M. トケイヤー
 9位 百年の孤独 G. マルケス
 10位 フォービキナーズ全学連
 菅 孝行 他

- 大阪 旭屋書店
 1位 気くばりのすすめ 鈴木 健二
 2位 東京漂流 藤原 新 他
 3位 株式作戦・最後の選択 松本 享
 4位 治る治るきつと治る 越智 宏倫
 5位 こころの診察室 清島 啓次郎
 6位 老化は食べ物が原因だった
 B. S. フランクク
 7位 気になる視線 中森 明菜
 8位 心で語ろう 鈴木 健二
 9位 自分学のすすめ 鈴木 健二

10位 男は20代に何をなすべきか

鈴木 健二

東京 新宿

紀伊国屋書店

- 1位 株式作戦・最後の選択 松本 享
 2位 髪がグングン生えてきた 大槻 均
 3位 新・医者のないしょ話 志賀 貢
 4位 坪内寿夫・奇跡の経営力 竹村 健一
 5位 気くばりのすすめ 鈴木 健二
 6位 老化は食べ物が原因だった

B. S. フランクク

- 7位 治る治るきつと治る 越智 宏倫
 8位 気になる視線 中森 明菜
 9位 NHK大河ドラマストーリー・徳川家
 康 日本放送出版協会

10位 エントロピーの法則 J. レフキン
 (日本読書新聞 '83. 2. 7)



 図書館だよりをオフセット印刷に切換え
 てから、早や1年、もう卒業生を送り出す
 季節を迎えました。
 図書館では来年度の企画として、各教科
 の先生方の協力を仰ぎ、学生諸君にむけて
 の基本図書の選定をしていただき、図書館
 だよりに掲載していきたいと思っております。
 図書館に所蔵しない図書につきまして
 は、鋭意(予算の許す限り)購入してゆき
 たいと思っています。
 若者の活字離れが報ぜられる昨今ではあ
 りますが、そういう風潮にまどわされるこ
 となく、図書をひもとき、有意義な学生生
 活を送ってほしいと希うものです。
 なお、紙上を通じてではありますが、各
 先生方の御協力をお願いいたします。
